SILVA IAPONICARUM 日林
FASC. XXIII/XXIV/XXV/XXVI
第二十三・二十四・二十五・二十六号
SPRING/SUMMER/AUTUMN/WINTER
春・夏・秋・冬
2010

SPECIAL EDITION

JAPAN: NEW CHALLENGES IN THE 21ST CENTURY

Posnaniae, Cracoviae, Varsoviae, Kuki MMX

***Silva Iaponicarum** 日林*
Kwartalnik japonistyczny / Quarterly on Japanology / 日本学季刊誌
ISSN 1734-4328

KAROL ŻAKOWSKI
University of Łódź, Poland

青嵐会の興亡史 - 政策集団から派閥まで

青嵐会は、血判をした政治家達のグループとして、1970年代に有名になった。右翼的な思想を抱いているその政策集団は、田中角栄と福田赳夫との間の 「角福戦争」 の最中、 1973年に成立し、 福田赳夫の「別働隊」と呼ばれていた。日中国交正常化を始め、田中角栄の政策に強い異議を唱えていたからである。

青嵐会の主な方針は、 自民党の維新、 自由主義諸国との連携の強化、「教育の正常化」、憲法改正などであった。青嵐会の政治家は、特に 1974 年の日中航空協定に反対し、 自民党総務会で暴力を使うほど、その協定の締結に歯止めをかけようとした。1975年以降青嵐会の活動は弱体化したが、1979年にはそのグループの会長、中川一郎によって自身の自民党内派閥である「自由革新同友会」の旗揚げが宣言された。1980年代になると青嵐会の元会員は、重要なポストに就き、彼らの政治姿勢はより穏健となっていった。本論文では政策集団としての青嵐会から派閥への道を考察してみたい。

1.青嵐会成立の背景

青嵐会の設立には、自民党内情勢及び対中国政策の変化が大きく影響している。1972年の佐藤栄作首相の引退とともに、いわゆる「角福戦争」が始まった。それは田中角栄と福田赳夫、二人の有力な派閥領袖の間の政権争いという意味である。当初は福田赳夫外務大臣が佐藤後継抗争で優位に立っていたにもかかわらず、結局1972年7月の自民党総裁選挙で田中角栄に敗れた。

田中角栄の勝利は、中国問題を巧妙に利用した結果であった。自民党総裁選挙の1年前の1971年7月には、いわゆるニクソン・ショックが起こった。リチャード・ニクソン米大統領は、日本と連絡協議せずに中国訪問計画を発表し、日本の政界に大きな衝撃を与えた。ニクソン

・ショックの直後、経済界も世論も日中打開を強く期待し始めたが、台湾と太いパイプを持つ佐藤首相や福田外務大臣は国民の声に対応できなかった。 田中角栄は1972年5月に佐藤派の国会議員の過半数を引き連れて、自身の派閥の旗揚げをした後、親中の大平・三木・中曽根三派と協力協定を結んだ。その結果、1972年7月に自民党総裁および総理大臣に選ばれた（ジャコフスキ　2009：495-498）。

しかし中国を訪問する前に、田中角栄総理と大平正芳外務大臣は自民党内の日中国交正常化の合意を得なければならなかった。この問題について党内議論を尽くすために、自民党政務調査会の中国問題調査会が日中国交正常化協議会に拡大されたが、実は、この協議会は親台派議員の猛烈な反対発言の舞台になってしまった。中川一郎、渡辺美智雄を始め、数多くの右翼政治家は、日華断交に全面的な異議を唱えていた。中華民国との国交断絶は相手国に非礼であり、田中内閣が大陸中国に全面的な降伏を意味するという批判を述べて、ジュース瓶や灰皿などが飛び交うほど、 対中国接近に激しく反対した （田村、 豊島、小枝　2000：160）。結局、1972年9月に親中派と親台派の間の妥協の結果、日中国交正常化基本方針が採決された。早坂茂三によると「若手タカ派の軟化はすべて田中の非公式な個別説得によるもの」であった（早坂　1993：419）。

自民党は日中国交正常化を承諾したにもかかわらず、「わが国と中華民国との深い関係にかんがみ、従来の関係が継続されるよう十分配慮のうえ交渉すべきである」という留保が日中国交正常化基本方針に含まれた。このような曖昧で巧妙な表現を利用することで田中総理が自民党内対立を少しでも緩和したことは否定できない。しかし、その後「従来の関係」という表現の解釈問題が現れてきた。親台派は「従来の関係」 には外交関係も含まれると解釈したが、 親中派の主張は「従来の関係」というのは、経済・文化・社会関係という意味に過ぎなかった。 1972 年9月29日の日中共同声明調印の直後[1]、 大平外務大

[1] 日中共同声明では、 台湾問題に関して、 次のような条項があった：「中華人民共和国政府が中国の唯一の合法政府である。（…）中華人民共和国政府は、台湾が中華人民共和国の領土の不可分の一部であることを重ねて表明する。日本国政府は、この中華人民共和国政府の立場を十分理解し、尊重し、ポツダム宣言第八項にもとづく立場を堅持する」（毛利　2006：75-76）。

臣は記者会見で「日中国交正常化の結果といたしまして、台湾と日本との間の外交関係は維持できなくなります」と明言した（田村、豊島、小枝 2000：179）。親台派はこの発言によって基本方針が破られたと主張した。

田中と大平による「裏切り」は青嵐会成立への主な刺激になったといえる。浜田幸一によると：「日華平和条約の廃棄に当っては、国会の審議を経ないのでは憲法違反になる」（林 1984：322）。青嵐会の代表世話人になった中川一郎が強調したとおり：

> 青嵐会結成の原動力は、角さんへの失望感と反発だった。青嵐会メンバーのうち福田派以外は、ほぼ全員が昭和四十七年の総裁選挙で角さんに投票したんだ。（…）僕なんか、お世話になった福田さんに土下座して謝ってまで、角さんに一票を投じた。佐藤栄作の長期官僚政治には国民も飽きがきていたし、我々も息がつまって、何とか状況を打破したかった。（…）ところが、首相になった途端に角さんは豹変した。ソ連とちがって、誰一人として抑留しなかった敗戦日本の恩人・蒋介石を切り捨て、共産中国との国交回復に転じた。（…）これじゃあニッポンはつぶれて共産化しちゃう、と思った。（河内2009：46)

青嵐会の座長になった中尾栄一は蒋介石への「信義の欠ける」行為を「エコノミック・アニマル」の行動と呼んで、青嵐会結成の「直接的原因になっているのは、昨年の田中内閣が成立して間もなく起こった中国ブーム」であると示した（中尾 1973：24-27）。

青嵐会は 1973 年7月17日に成立した。会員は自民党国会議員31人（福田派から10人、中曽根派から9人、椎名派から4人、水田派から3人、三木派から1人、無派閥4人）であった（河内 2009：37）。会の名称については色々な提案、例えば「命を捨てる会」「血みどろになる会」「泥をかぶる会」があった。結局有名な小説家で政治家の石原慎太郎の提示が承諾された。石原の説明によると、青嵐会というのは：

> 夏の嵐という意味なんだ。夏の嵐には雷鳴轟き、稲妻は光り、驟雨が火がつくように降るんだ。そのあとは必ず、すっきりした青空が見えるものなのだ。新緑みな甦る。生きとし生きるものに、皆、生気を与える。活力ある澄んだ社会をつくるのが青嵐会なんだ。（塩田　1988：163）

血判も石原慎太郎のアイディアであった。塩田道夫が記述したとおり：

> 日頃、大きなことを言う議員でも、ちょっとしか血を出さなかった議員もいた。たくさん出して勢いよく血判を押す議員もいて性格がよく判った。埼玉のある議員は怖がってしまい、一人だけ逃げてしまった。あとで脱会した議員は、血判の押し方も小さかったようだ。（塩田　1988：165）

血判のメリットの一つであったのは、青嵐会は有名になるのであろうという希望であったに違いない（河内　2009：30）。

2.理念に基づいた政策集団

青嵐会は派閥ではなく、明らかな理念を持つ政治家の超党派グループとして船出した。会員の接着剤は極端な右翼的思想であったといえる。青嵐会に属する国会議員は強い反共産主義を抱いていて、憲法改正、再軍備、自主外交、愛国教育などを求めていた。同時に福祉社会を実現したかった。青嵐会の特徴は、そのグループへの所属者の圧倒的な多数が農漁村地域の出身者で、中核メンバーが選挙に非常に強かったということである。そのおかげで、自身の極端な思想を遠慮なく暴露できたといえる （河内　2009：39-40）。 青嵐会趣意書は以下のとおりであった：

> 自由民主党は、敗戦のドン底から、驚異的な繁栄を築いてきた。しかしながら、今や歴史の推移とともに、高度経済成長のもたらした物価、公害などもろもろのヒズミを生じているが、われ

らはこれを是正し、克服する努力とともに、わが党・立党の精神に立ち返り警鐘を乱打し、政治並びに党の改革を断行せんとするものである。われわれは、いかなる圧力にも屈せず、派閥を超越し、同志的結合を固め国家・民族的視野に立って行動する。
それこそがわれらに与えられた歴史的使命であることを確信する。
記
一、 自由社会を護り、外交は、自由主義国家群との親密なる連繋を堅持する。
二、 国民道義の高揚をはかるため、物質万能の風潮を改め、教育の正常化を断行する。
三、 勤労を尊び、恵れぬ人々をいたわり、新しい社会正義確立のために、富の偏在を是正し、不労所得を排除する。
四、 平和国家建設のため、 国民に国防と治安の必要性を訴え、この問題と積極的に取り組む。
五、 新しい歴史に於ける日本民族の真の自由・ 安全 ・ 繁栄を期するため、自由独立の憲法を制定する。
六、 党の運営は、 安易な妥協・官僚化・日和見化など、 旧来の弊習を打破する。
結び
青嵐会は、いたずらな論議に堕することなく、一命を賭して、右実践することを血盟する。（「青嵐会趣意書」1973：195-196）

青嵐会の主な目的は自民党の維新であった。中尾栄一が強調したとおり：

いまのように、 だらけきって、 戦闘性を失った自民党の体質を、それこそ「革命的」に改善しなければなりませんよ。その第一は、党内の一部にある、奇妙な進歩派の、基盤と哲学を全く欠いた発言をやめるべきです。安易な妥協に走ることは避けるべきです。 それから官 僚 的 な 風 習 も打 破 すべきですね。（…）大平派の一つの特徴は、官僚出が多い。功成り名を遂げた官僚では、 一応、 位人身を極めてその後代議士になったか

> ら、面倒くさいことだとか勇断をもってやるということにちゅうちょするのではないでしょうか。そこで最近の代議士気質を先輩職員に聞いてみると、ただ代議士になっていればいいのだという考え方が普遍的に蔓延してきたと言う。それはサラリーマンですよ。この弊害を完全になくさなければなりません。(中尾　1973：36-37）

中尾栄一によると自民党の再編というのは、脱官僚の政治主導の確立のみならず、金権政治の廃止という意味でもあった：

> これからの政治は、目先の利益誘導政治だけでは駄目です。哲学がなくては先々まで自民党と言うわけには行かないでしょう。（…）いまの自民党にしてもイデオロギーの説得によって国民をリードし、支持を集めて来たと言うより、利益で誘導して来た。金権政治そのものであると言っていいかもしれない。（中尾　1973：38-39）

島田安夫は自民党内派閥体制も批判していた：

> 第一は派閥の弊害。内閣および党の人事はすべて派閥の年功順位によって構成される。政党内における派閥とは何か - 役職や権力へのパスポートを入手するための集団なのか…。金権とのゆ着を断ち、体制内改革こそ断行すべきでありましょう。（島田　1974：76）

このように青嵐会は大平正芳の特徴である官僚主導体制も、田中角栄の特色である金権政治と派閥間競争も厳しく批判していた。

1970年に切腹した三島由紀夫を始め、青嵐会は右翼的な活動家の思想の影響を受けていた（河内　2009： 70-83）。 その政策集団の多くの会員がタカ派であることを誇りに持っていたことは否定できない。中尾栄一が強調したとおり：

> 私どもがタカ派だとか、右翼だと言うのなら喜んでその批判を受けましょう。またいまの「ハト派」とか、いう格好のいいこ

とをだけいう人々になにができるかということは、やがて歴史が示しますよ。（中尾 1973：23-24）

阿部喜元も自民党の穏健な政治家を厳しく批判していた：

ハト派の連中は、河野洋平君が「人のいうことを聞いてやる」と、マスコミ向けにいいことをいっておりますが、これは共産主義とも妥協するということですよ。ハト派といわれる連中は貞操のない芸者か、キャバレーの女と同じで、ほんとうに頼りない。（阿部 1974：161）

そして玉置和郎によると、共産主義への対決と憲法改正は20年前の自民党結党の時の政治路線への復帰に過ぎなかった　（玉置　1973：171-172）。

青嵐会の右翼的な彩色は、多くの国防族と文教族の国会議員を含めていたことに由来する[2]。三塚博が強調したとおり：

政治の基本問題は、国会の論議の中から巻き起って、やがて国民にわかっていただくわけですね。それがいま防衛の問題がタブーになっている。その社会的背景を、われわれから考えますと、政党 - 特にこれは自民党側にいえることですけれども - 選挙にマイナスに作用するのではないだろうか、あるいは、このことを強く主張することが政党の今後の活動の中においてマイナスになってくるのではないだろうかというような目先の計算が働いている。政権の維持、あるいは選挙戦を勝ち抜く方法論的な発想で、　防衛論議というものを今日までよけて通ってきた。（…）われわれがやらなければならないことは、国の教育課程に、国を守るということのカリキュラムを入れるべきでしょう。（三塚 1973：101-102）

---

[2] 族議員というのは、　ある分野で豊かな経験を誇る政治家のグループであると言える。特に自民党政務調査会の部会長以上の経験のある自民党国会議員は「族」に所属できる。

文教族の有力なメンバーである森喜郎は宗教と倫理教育の導入を訴えていた：

> やっぱり、正当なる歴史をちゃんと子供たちに教えていないということが大きいですね。神話なんて嘘で、でたらめだ、と決めつけてしまえば、だれも「心」の存在なんて認めませんよ。やっぱり神仏というものを認めるからこそ、心というものを感ずる。神話や信仰心が何のために必要なのかということは大人になって理解することでしょう。（森 1973：141）

青嵐会の外交基本政策を作成したのは、藤尾正行であった。彼によると：

> わが国の外交は、すべてソ連、中華人民共和国、北朝鮮人民共和国等、アジアにある共産主義諸国で、直接間接の物理的攻撃力をもった諸国の脅威から日本国民を守るという、安全保障のラインにそって展開されなければならない。(…)政府は昨年九月の中華人民共和国との国交樹立を自ら高く評価しているが、一方においては長年に亘ってわが国の復興、発展に力を藉してくれた中華民国との関係を基本的に傷つけ、自由主義諸国の結束に自ら大きなヒビを入れる結果を来たした。この外交は明らかにわが国の安全保障上、失うところ極めて大きく、得るところ少ない、わが国外交の基本指針に反する措置であったと指摘せざるを得ない。よって、今後の日中間の実務協定では、わが国と中華民国・国民政府間に現に存在する政治、経済、文化技術関 係をこれ以上 傷つけないよう 留 意 しなければならない。（藤尾 1973：197-202）

実は、藤尾正行が強調した台湾政府の利益の防衛は、青嵐会の存在意義であったといえる。

3.青嵐会の主な活動

青嵐会活動の時期は、自民党の歴史において一番凄まじい党内対立の時代であったといっても過言ではないであろう。その政策集団は福

田赳夫に近い政治家からなっていて、福田派の「別働隊」と呼ばれるようになった。そのために、青嵐会の運動は福田赳夫の政敵である田中角栄の任期の時に一番激しかった。青嵐会の政治家は特に国民党政府の利益を擁護し、日中実務協定の締結に歯止めをかけようとしていた。同時に、田中内閣を覆して、親台派の福田政権の実現に一生懸命努めていた。

1974年1月の上旬に大平外務大臣が北京で日中航空協定について中国側と折衝した結果、この問題に関して外務・運輸両省は6項目からなる案を作成した[3]。 台湾側は特に台湾飛行機のマークの解釈の変更と「中華航空」の羽田空港における営業所等の別の団体への委託に断固反対した。青嵐会のメンバーは1974年1月18日夜、緊急総会を開催し、日本の外交姿勢が変わらない限り、大平外務大臣の不信任案を提出する方針を決めた。 そうではあるが、 自民党執行部の認可なしには、この脅かしの実現は不可能であった（「外相不信任の構え」『朝日新聞』1974年1月19日、2頁）。さらに、1974年1月19日の自民党の第29回定期大会に、 中尾栄一は青嵐会の代表として、 「自主憲法制定」や「日中航空協定批判」などで持論を訴えた。それまでは大会が単なる儀式であったが、中尾はこの伝統を破った（「参院選へ奮起促す」『朝日新聞』夕刊、1974年1月19日、1頁）。そして中尾演説の後「浜田幸一が会場からハンドマイクで『総裁答弁！』と連呼、会場整理の職員たちと小競り合いを演じる一幕もあった」 （河内 2009：111）。

1974年1月26日に国民集会の開催の際、青嵐会活動はピークに達したといってもいい。右翼的な国会議員は、自身後援会の会員を含めて、2万人以上の出席者を東京武道館に集めた。タカ派の政治家は内閣の批判する宣言を連発した。渡辺美智雄が強調したとおり：「この

[3] 大平外相の案の6項目は次のとおりであった：「①日中航空協定を政府間で締結すると同時に、日台路線（双方の以遠権を含む）は民間取り決めを結んでこれを維持する。②日本航空は日台路線に就航しない。③日本側は『中華航空』の社名と旗の変更は求めないが、社名と旗の性格に関する日本政府の認識を別途明らかにする。日本側当局が『中華航空』に言及する際は『中華航空（台湾）』とする。④『中国民航』は成田国際空港を、『中華航空』は羽田空港を使用する。⑤『中華航空』の大阪空港乗り入れは止め、他の空港に移す。⑥『中華航空』の日本にある営業所、地上サービスは、代理店に委託する」（玉置和郎記録集編纂委員会 1988：118-119）。

混乱期に日本民族を守り、教育、経済を守って生活を守る能力は自民党しかない。　田中内閣がつぶれても自民党をつぶすわけにはいかない」。最後に石原青嵐会幹事長は「（田中内閣が）一部の利益にかたよる姿勢を捨てて、国民の信頼を得るに足りる政治に踏み切らない限り、政権の交代を要求してその実現に身を賭す」という倒閣宣言案を朗読した（玉置和郎記録集編纂委員会　1988：110-111）。

1974年2月上旬に日中航空協定を議論する自民党総務会では、青嵐会による政府批判が一番激しかった。総務会正規メンバーの藤尾正行と玉置和郎以外には、10人ほどの他の青嵐会会員がオブザーバーとして会合に来た（河内　2009：112-115）。しかし、彼らの振る舞いは「オブサーバー」よりはるかに積極的であった。たとえば浜田幸一はテーブルを跳ね飛ばし、灰皿とコップが散乱した（玉置和郎記録集編纂委員会　1988：112）。親台派の抗議を和らげるために、自民党執行部は「日中共同声明を基礎として日中航空協定を締結すると同時に、日台路線は民間とり決めを結んでこれを維持する。（…）政府が具体的処理をするにあたって、副総裁、党三役と協議し、慎重に対処されたい」という妥協案をまとめたが、青嵐会は譲らなかった。総務会では全会一致が不文律原則になっているにもかかわらず、今回は例外として妥協案が投票で採決された。24人中、反対は4人であった（河内 2009：123-124）。

青嵐会メンバーの乱暴な行為はハト派政治家の反発を招いた。1974年2月上旬に、河野洋平を中心に、田中・大平・三木・中曽根という主流四派の若手議員は新しい政策集団、自民党正常化連絡会議の設立を宣言した。新グループの方針は「①青嵐会に対する監視体制を強め、こんご少しでも『どうかつ的言動』があったらただちに党紀委員会に提訴する②青嵐会に対する執行部の生ぬるい姿勢に反省を求め、執行部のこんごの態度いかんでは『不信任』を打ち出す」というものであった（「自民ハト派議員、新グループ発足、青嵐会との対決強める」『朝日新聞』1974年2月6日、2頁）。しかし、自民党正常化連絡会議は青嵐会ほど活発な運動を行わなかったし、親台湾勢力に歯止めをかけることもできなかった。

結局、青嵐会の反対にもかかわらず、日中航空協定が1974年4月20日に締結された。同日は、大平外務大臣が「日本国政府としては日中

両国の共同声明に基づき、同声明発出の日以降、台湾の航空機にある旗の標識をいわゆる国旗を示すものと認めていないし、『中華航空公司（台湾）』を国家を代表する航空会社としては認めていない」と宣言した （「日中航空協定調印に際しての大平外務大臣談話」 1998：471）。この発言に答えて、国民党政府は日華空路を断絶した。日本政府外交姿勢に抗議して、中川一郎、渡辺美智雄、森下元晴、三人の青嵐会メンバーは、大蔵、農林、通産、それぞれの政務次官のポストの辞表を表明した。1974年4月23日の政務調査会審議会などの会議では、中川一郎、中尾栄一、浜田幸一らは大平外務大臣の責任追及を要求し、 日中航空協定の批准を延期しようとしていた （林 1984：411）。それにもかかわらず、1974年5月7日に協定が衆議院で批准された。青嵐会20人を含めて80人以上の親台派の国会議員が本会議を欠席した。さらに、3人は党議拘束を破って起立せず、反対票を投じた（河内 2009：127－129）。このような青嵐会の反対をよそに、日中国交正常化から二周年の1974年9月29日には、日本と中国との間の通行が正式に始まった（徐 2002：84）。

1974年11月に田中角栄は金権政治疑惑のため辞任し、三木武夫が新首相に選ばれた。三木（1974-1976年） と福田（1976-1978年）の任期の時、 青嵐会は主流派に属していて、 内閣を批判する理由がなかった。これはその時の中国での政権抗争のため対中接近が不可能であったことにも由来する。しかし1978年に入ると、中国内の不安定な状態が終わり、青嵐会の恩人である福田赳夫首相でさえも日中平和友好条約の締結を促進するようになった。当初は親台派の政治家は条約についての交渉を延ばすために、尖閣諸島主権論争などを利用しようとしていたが[4]、 結局福田総理は個人的な説得で彼等の反発を和らげた。福田が回想したとおり：

> 七八（昭和五十三）年二月二日の事務レベルによる交渉再開から、八月の園田外相訪中までの間、自民党内では各種レベルの会議が持たれ、（…）あらゆる角度からの議論が尽くされた。

[4] 尖閣諸島は東シナ海における無人群島である。中華人民共和国と中華民国は1970年からその領有権を主張している。青嵐会によると日中平和友好条約で中国側は尖閣諸島が日本に所属することを認めるべきであった。

> しかし、 いわゆる慎重派といわれる人々の中心には、 灘尾弘吉、 町村金五、 藤尾正行氏ら私と親交の深い人たちが多かった。長い間、政治生活で苦楽をともにしてきた人々である。だから最後は私の決断に従ってくれるだろうと信じていたし、事実、その通りになったが、とりまとめまでには人知れぬ苦労もあった。だからこそ、この交渉は私でなければできないのだという自負もあった。（福田 1995：301）

日中平和友好条約は1978年8月に調印され、 10月には日本国会で批准された。多くの親台派の代議士が欠席して、浜田幸一と玉置和郎を始め、5人の議員が反対票を投じた（林 1984：454）。

日中平和友好条約の批准とともに日中国交正常化過程がようやく完成し、青嵐会の存在意義がなくなったといってもいい。親台派国会議員の最後のイニシアチブの一つであった米国式「台湾関係法」採決の要求は、 1979年に失敗に終わった[5]。 そのようにして青嵐会の活動は自然に幕を閉じた。

4.青嵐会解体後の元会員による政治活動

政策集団としての青嵐会の寿命は終わったにもかかわらず、その右翼的なグループは派閥として生まれ変わったといってもいい。1979年5月15日には、中曽根・福田・旧水田派や無派閥などの国会議員１７人が集まって、自由革新同友会という名で中川派が旗揚げをした（「〝中川派〟きょう旗揚げ」『朝日新聞』1979年5月15日、2頁）。新グループは派閥であったにもかかわらず、福田派別働隊の役割を保存し、1979年11月の「40日抗争」などで福田赳夫の利益の擁護に努めていた[6]。 興味深いことに、 青嵐会の一番積極的な活動家の一人であった浜田幸一は、今回は大平・田中陣営に回り、暴力を使うほど大平正芳首相を防衛した。浜田は自民党本部において反主流派に椅子や机

[5] 平沼赳夫とのインタービュー、2009年3月12日、東京、永田町ビル。

[6] 「40日抗争」というのは、 1979年の衆議院選挙後の大平正芳と福田赳夫との間の首相指名をめぐる争いという意味である。福田・中曽根・三木・中川反主流四派は大平総理大臣を覆すようとしていたが、失敗した。

などで建てられたバリケードを潰し、「お前ら、自民党は可愛い子供たちのためにあることを忘れるな。なんだ、全学連のマネなんかしやがって！」と叫ぶ一幕も演じた（河内 2009：186）。

中川派の存在は長くなかった。五大派閥体制の枠内で、自由革新同友会のような小派閥は生き残ることができなかった。中川一郎は1982年の自民党総裁選挙で出馬したが、大敗し、1983年1月に自殺した[7]。派内で主導権を把握したのは、石原慎太郎であったが、そのグループはさらに小さくなった。 1984年2月に玉置和郎は新 「サロン的集まり」の設立を模索していたけれども、他の元青嵐会メンバーはこれに応じなかった（「自民新集団あえなし――玉置氏の中間・石原派結集工作、 派閥化警戒で足並み乱れ」 『日本経済新聞』 1984年2月1日、2頁）。石原派は1984年9月に台湾での研修会を開催し、親台姿勢を強調した（「石原派、台湾で研修会」『日本経済新聞』1984年9月4日、2頁）。しかしその後間もなく、1984年10月に、自由革新同友会に属する石原慎太郎、長谷川西郎、長谷川峻、高橋辰夫、平沼赳夫、中川昭一 （中川一郎の息子） の6人は福田派に合流した （「福田派73人に」『朝日新聞』1984年10月31日、1頁）。

青嵐会の精神を受け継いだのは、1986年7月に設立された若手国会議員25人の政策集団、国家基本問題同士会であった。その主なメンバーは青嵐会の元会員と強いつながりがあった。例えば亀井静香国家基本問題同士会座長は代議士になる前から藤尾正行と親しかったし、事務局長の平沼赳夫は旧中川派に属していた。また、村上正邦は玉置和郎とともに成長の家という新興宗教グループの支持のおかげで初当選を果たした。国家基本問題同士会は右翼的な歴史教科書や首相による靖国神社参拝を促し[8]、 青嵐会のように過剰な対中国接近に反対していた。それにもかかわらず、そのメンバーは血判をしなかったし、活発な運動を行う勢いも欠いていたため、「パワー不足」であると他の

[7] この自殺の理由については色々な解釈がある。 浜田幸一によると、 中川自殺の原因の一つは福田赳夫への失望感であった（浜田 1993：139-149）。

[8] 中曽根総理大臣は1985年に初めて 8 月 15 日に靖国神社への公式参拝を行ったが、その後中国と韓国からの反発に答えて、首相としての靖国参拝を取りやめた。そのため右翼勢力に凄まじく批判されていた。

政治家に皮肉られていた（「翼広げる自民タカ派の国家基本問題同志会　外圧への反発バネに」『朝日新聞』1986年9月20日、2頁）。

実は、親台派の多くの政治家は、以前より中国に接近する傾向になったことを否定できない。中川一郎の子分であった平沼赳夫は、1980年代と1990年代になると、多くの青嵐会の元会員が重要なポストに就き、 親台への熱心さを失ったと認めている[9]。 大陸中国は1978年に改革開放路線を選んでから、共産主義国家ではなくなりつつあったと言ってもいい。例えば、1970年代に日中国交正常化と日中平和友好条約締結に徹底的に反対していた中山正暉は、1988年に郵政大臣として中華人民共和国を訪問した時に「今の中国は素晴らしい」と発言した。他の青嵐会元会員である浜田幸一にとって、　そのような振る舞いは「裏切り」 であった （「［政界メモ］ 元青嵐会、 親中派にクラ替え？」『読売新聞』1988年7月7日、3頁）。

青 嵐 会 設 立直後にそのグループの活動の激しさに失望した人もいた。例えば山崎拓はこのように回想する：

> 渡辺美智雄先生に誘われて入ったんですが、入会式のときに血判を押させられたのには参りました。私はタカ派の頭目のように言われてますが、実際はハト派なんです。（…）「青嵐会」入会直後に金大中氏拉致事件が起きました[10]。　ところが「金大中のごとき共産主義者は殺されてしかるべきだ」という趣旨の演説があって、私はあきれました。我々は自由民主党じゃないかと。自由民主主義者なんだから、共産党が街頭で共産主義の思想を流布宣伝する自由というものを命がけで守ってやるのが自由民主主義者の神髄じゃないかと。共産主義者は海に放り込んでフカに食わせろなんていう話は聞くに堪えないと。これはダメだと思ってやめたわけです。（山崎　1999：247-248）

しかし青嵐会元活動家の中には例外もあった。藤尾正行などは政治出世の終わりまで右翼的な信条を守った。1986年に藤尾は文部大臣に

---

[9] 平沼赳夫とのインタービュー、2009年3月12日、東京、永田町ビル。

[10] 韓国人の民主化運動家、 後に大統領になる金大中は1973年8月に東京に滞在中韓国中央情報部によって拉致された。

なった時にも、 南京大虐殺を否定し、 極端な思想をあきらめなかった。さらに、国家基本問題同士会とともに中曽根総理大臣の親中政策を批判し、靖国神社参拝などを要求した：

> いまの日本は、自分の手足をまず切って、相手に合わせたからそれでいいとする。これではとても外交とは言えやしません。靖国問題だって同じことです。昨年、一ぺんはよしとした閣僚の公式参拝を、外から文句をつけられたからといって、なぜ辞めなければならんのですか。それなら、はじめからやらなきゃいい。これは一つの見識ですから。要するに、相手に合わせることが外交であるという、とんでもない錯覚があるってことなんだな。（野村 1987：22）

中曽根首相は藤尾を罷免せざるを得なくなったわけである。

もう一人の頑固な右翼的な政治家は石原慎太郎である。元自由革新同友会リーダーは1989年にソニー創業者の盛田昭夫とともに『「ＮＯ」と言える日本』というベストセラーを出版し、対米従属の批判を始め、 自立した外交を主張した （盛田、石原　1990：116-130）。1995年に石原は自民党から離脱して、1999年に東京都知事に選ばれたが、物議をかもす右翼的な発言をやめなかった。しかし青嵐会元会員の中に一番出世したのは、福田赳夫の子分の森喜郎である。2000年に森は総理大臣に選ばれたが、任期が短かった。「政府側が若干及び腰になるようなことを前面に出して、日本の国はまさに天皇を中心とする神の国であるということを国民にしっかりと承知していただくという思いで活動してきた」という失言などのため内閣支持率が急落した結果（五百旗頭、伊藤、薬師寺　2007：232-235）、2001年に森は辞任を余儀なくされた。

現在は多くの青嵐会元会員は高齢のため政界から引退したにもかかわらず、彼らの息子や娘は国会議員ポストを受け継いでいる。2007年には真 ・ 保守政策研究会が成立した[11]。 中川昭一、 石原宏高、 江藤拓、中山泰秀など、その超党派グループの多くの会員は青嵐会活動家のチルドレンであった。最高顧問のポストには、中川一郎の弟子で自

[11] 現在の名称は創生「日本」で、会長は安倍晋三である。

由革新同友会元会員の平沼赳夫が選ばれた。新集団の使命は国内（格差、農業再生、治安維持、教育再生、社会保障）、外交（北朝鮮などによる国家テロ）、地球規模（環境、自然災害、資源戦争）という三つの危機への対応である （河内 2009： 18-19）。 言うまでもなく、その会の目的は青嵐会の精神に完全に合致しているが、新グループはまだ青嵐会のように活発な運動を行っていない。

5.結論

青嵐会は大きな集団ではなかったにもかかわらず、その活動は自民党史上類のないことであったといっても過言ではない。青嵐会会員は血判のおかげでメディアの注目を集めて、倒閣宣言をするほどの勢いを見せた。そのグループの一番重要な目的の一つは台湾政府利益の擁護であった。大平外務大臣の責任を追求したり、自民党決定機関で暴力を使ったりして、青嵐会メンバーは1974年の日中航空協定や1978年の日中平和友好条約などに歯止めをかけるようとしていた。少数派にとって過激的な運動だけが党執行部への挑戦になりえたからである。

しかし青嵐会の激しさはそのグループの衰退に拍車をかけたといってもいい。メンバーの一部は、反共産主義者であっても、青嵐会の活動が過激すぎると感じ、血判直後退会したわけである。そして1978年に日中平和友好条約が批准され、青嵐会の親台政策は失敗に終わり、その集団の存在意義がなくなった。1979年に青嵐会は派閥として生まれ変わったが、1983年の中川一郎自殺後6人ほどの小さいグループになり、1984年には福田派に併合された。その後自民党内で色々な極右集団が結成されたが、青嵐会のように激しい運動を行わなかった。

参考文献

阿部喜元 （1974） 「人材養成は国家の急務・出発点」 湊徹郎 『青嵐会からの直言』浪漫

五百旗頭真、伊藤元重、薬師寺克行編（2007）『森喜郎－自民党と政権交代』朝日新聞社

「石原派、台湾で研修会」『日本経済新聞』1984年9月4日、2頁

河内孝（2009）『血の政治 - 青嵐会という物語』新潮社

「外相不信任の構え」『朝日新聞』1974年1月19日、2頁

「参院選へ奮起促す」『朝日新聞』（夕刊）1974年1月19日、1頁

塩田道夫（1988）『命燃ゆる政治家玉置和郎』グラフ社

島田安夫（1974）「どこへ行く大国に本」湊徹郎『青嵐会からの直言』浪漫

「自民新集団あえなし――玉置氏の中間・石原派結集工作、派閥化警戒で足並み乱れ」『日本経済新聞』1984年2月1日、2頁

「自民ハト派議員、新グループ発足、青嵐会との対決強める」『朝日新聞』1974年2月6日、2頁

ジャコフスキ・カロル（2009）「1972年日中国交正常化をめぐる自民党内対立」A. Jabłoński, S. Meyer, K. Morita. *Civilization of Evolution, Civilization of Revolution: Metamorphoses in Japan 1900-2000*. Kraków: Manggha.

徐之先編（2002）『中日关系三十年（1972-2002）』时事出版社

「［政界メモ］元青嵐会、親中派にクラ替え？」『読売新聞』1988年7月7日、3頁

「青嵐会趣意書」（1973）中川一郎『青嵐会―血判と憂国の論理』浪漫

玉置和郎（1973）「青嵐会の将来と日本」中川一郎『青嵐会―血判と憂国の論理』浪漫

玉置和郎記録集編纂委員会編（1988）『政党政治家玉置和郎』学習研究社

田村重信、豊島典雄、小枝義人（2000）『日華断交と日中国交正常化』南窓社

「翼広げる自民タカ派の国家基本問題同志会
外圧への反発バネに」『朝日新聞』1986年9月20日、2頁

中尾栄一（1973）「青嵐会はかく闘う」中川一郎『青嵐会―血判と憂国の論理』浪漫

「〝中川派〟きょう旗揚げ」『朝日新聞』1979年5月15日、2頁

「日中航空協定調印に際しての大平外務大臣談話」（1998）『日中関係基本資料集1947年－1997年』霞山会、470-471頁

野村拓司（1987）『藤尾 - それからの100日』近代政経研究会

浜田幸一（1993）『日本をダメにした九人の政治家』講談社

早坂茂三（1993）『政治家田中角栄』集英社

福田赳夫（1995）『回顧九十年』岩波書店

「福田派73人に」『朝日新聞』1984年10月31日、1頁

藤尾正行（1973）「青嵐会の外交の基本政策」中川一郎『青嵐会―血判と憂国の論理』浪漫

三塚博（1973）「日本の危機は克服できるか」中川一郎『青嵐会―血判と憂国の論理』浪漫

毛利和子（2006）『日中関係：戦後から新時代へ』岩波書店

森喜郎（1973）「教育に『心』を取り返そう」中川一郎『青嵐会―血判と憂国の論理』浪漫

盛田昭夫、石原慎太郎（1990）『「ＮＯ」と言える日本－新日米関係の方策』光文社

山崎拓（1999）『2010年日本実現』ダイヤモンド社

林金莖（1984）『梅と桜－戦後の日華関係』サンケイ出版